

- 日時 2020年10月17日(土) 午後1時から3時
- 場所 あきる野市中央公民館(〒197-0814 あきる野市二宮683)
- 講師 中村海洞(博士(書道学)、大東文化大学人文科学研究所研究員、オープンカレッジ講師、)
- 企画運営 あきる野書道文化を楽しむ会(恵良雅代)
- 後援 あきる野市文化団体連盟

(1)『萬葉集』について

●はじめに
日本の国家としての礎いずえは奈良時代に形成されたといつてよい。
奈良時代は決して平安温和な時代では無かったが、国のかたちが形成されてゆく時代のエネルギーに充ち溢れ、今の私達につながる民族の文化・情念が雄々しくそして情緒的に育はぐくまれた時代であった。
今年和銅三年元明天皇の奈良遷都から1310年の年にあたる。『万葉集』は奈良時代の人々の心を如実に映し出す最大の文化遺産の一つであろう。今回は『万葉集』東歌と題して万葉の昔に想いを馳せ、当地あきる野を含む武蔵の往時の姿を想い浮かべてみたい。

1-1)『萬葉集』の時代

●『萬葉集』概略
仁徳天皇の皇后磐姫の作(5世紀頃)と言われる歌から天平宝字3年(759)の大伴家持の歌まで約400年にわたる全国各地、各階層の人の歌を収められている日本最古の和歌集。天皇、貴族から下級官人、防人など様々な身分の人間が詠んだ歌を4500首以上(『日本古典文学大系』4516首、国歌大観)も集めたもの。
日本文学における第一級の資料である事は勿論だが、方言による歌もいくつかが収録されており、さらにその中には詠み人の出身地も記録されていることから、言語学の資料としても非常に重要な資料である。
『萬葉集』の成立に関しては詳しくは判っていない。勅撰説、橘諸兄説、大伴家持説など古来種々の説があるが、現在では、家持説が最有力。成立は759年(天平宝字3)以後と見られる。
ただ『萬葉集』は一人の編者によって纏められたのではなく、巻によって編者が異なること、家持の手によって二十巻に最終的にまとめられたとするのが妥当とされている。大伴家持(養老2年(718)頃～延暦4年(785))

1-2) 残存の『萬葉集』

- ◎原本は存在せず、現存する最古の写本は11世紀後半ごろの『桂本萬葉集』(巻4の一部のみ)。次点本は『元暦校本萬葉集』(暦元年(1184)六月九日の右近権少将(花押)の奥書)。現在、20巻すべてそろったもっとも古い写本は、鎌倉時代後期の写本で、「西本願寺本『萬葉集』」と呼ばれているものである。
- ◎「五大萬葉集」
平安時代書写の萬葉集の古筆五種の総称。
①桂本(かつらぼん)・②元暦校本(げんりやくこうぼん)③藍紙本(あいがみぼん)(らんしぼん)・④金沢本(かなざわぼん)・⑤天治本(てんじぼん)をいう。

(2) 東歌について

『萬葉集』巻14の全体を東歌とした纏められた(田辺幸雄『萬葉集東歌』)その部建てとして雑歌、相聞、挽歌の三大部建ての他、比喩歌、東歌、防人歌があてられている。
雑歌: 「くさぐさのうた」の意で、相聞歌・挽歌以外の歌。公の性質を持った宮廷関係の歌、旅で詠んだ歌、自然や四季をめめた歌など。
相聞歌: 「相聞」は、消息を通じて問い交わすことで、主として男女の恋を詠みあう歌
挽歌: 棺を曳く時の歌。死者を悼み、哀傷する歌
比喩歌: 自分の思いをものに託して表現した歌。
東歌は東国の庶民の歌と考えられるが、東歌と防人歌は厳密な区別が見当たらず、東歌にも防人歌が含まれると考えられている。

○あずまぶり

東歌は愛の表現の単刀直入性や、特殊な語彙・語法表現が随所の使われており、賀茂真淵はこれを「東ぶり」といった(『萬葉考』)。「東ぶり」とは? 1. 東国の「民謡」とする説、2. 「民謡」ではないとする説 3. 東国「民謡」の変質した形態とする説、4. 東国在地の豪族らの創作歌とする説が有る。現在は第3節と4説に落ち着いている。

○東国という概念

《東国の特殊性》
東国は、信濃以東の東山道、三河以東の東海道の諸国を指すが、古代から大和朝廷と縁の深かった美濃と伊勢が外されている。井上光貞氏によれば「大化前代の地方組織上、東山道では信濃以東、東海道では三河以東は独自の組織を持っていた…そこには皇室直轄民が広く設定されていた…この地域は大和政権に服していたが普通の国造制が布かれるに至らなかった。」「東歌・防人歌に見られる律令時代の東国観念の1つである信濃遠江以東を東国とする考え方の生まれる史的背景はここにある」(『萬葉集大成5』古代の東国)
《都人や畿内の人々の東国への好奇心と憧憬》
●倭建命の東征譚(『風土記』)
●柿本人麻呂、高橋虫麻呂、山部赤人等の萬葉名歌への共感、やロマンチックなものをそこに感じようとした。
●平安までつながる:菅原孝標女の『更級日記』、業平の東下り(『伊勢物語』)、浮舟の常陸からの上京(『源氏物語』)

○東歌と詠まれた地域

全部で230首(異伝歌のうち一首全体を記すものを加えると238首)ある。
東歌: 上総1 下総1 常陸2 信濃1
相聞: 遠江2 駿河5 伊豆1 相模12 武蔵9 上総2 下総4 常陸10
信濃4 上野22 下野2 陸奥3
比喩歌: 駿河2 相模3 上野3 陸奥1
計12か国の90首と、国の不明な(未勘合国)の雑歌:17 相聞:112 防人歌:5 比喩歌:5 挽歌:1の計140首と並べられている。
東国に下った都の貴族の作?もあるかも知れないが、多くは労働や儀礼などの場で歌われた民謡や酒宴の席で歌われた歌、東国の人々に共有されていた歌謡と思われる。すべて作者不明。すべて整った短歌形式だが、もとは整わない形のもの採録、編集の過程で整えられたと考えられる。

2-1) 多摩川

(右九首武蔵国歌) 14/3373~14/3381を指す
14/3373
【原文】多摩河泊尔 左良須豆久利 佐良左良尔 奈仁曾許能兒乃 己許太可奈之伎
(たまかはに、さらすてづくり、さらさらに、なにぞこのこの、ここだかなしき)
【訓読】多摩川にさらす手作りさらさらに なにぞこの子のここだ愛しき
【意味】多摩川に玉川にさらす手作りの布のように、サラニサラニ どうしてこの子が こんなにひどく可愛いのかしら。(『日本古典文学大系』以下同)
【補足】
多摩川: 多摩は多摩川(多摩河泊) 多摩の横山(多摩能余許夜麻)の2か所
豆久利: 手作り:手織布、朝廷に「調(みつぎ)」として朝廷に納入
佐良左良尔; サラサラに副詞:更に更に、新たに新たに
己許太; ここだ副詞:沢山、こんなに甚だしく
●これは、多摩地域の、河原で布(麻布)を曝す作業歌。古来、布を曝すのは女性の仕事であった。従って男側から詠んだ歌だが実は女性がうたった歌と解釈される。

2-2) 武蔵野

14/3374
【原文】武蔵野尔 宇良徹可多也伎 麻左互尔毛 乃良奴伎美我名 宇良尔互尔家里
(むざしのに、うらへかたやき、まさでも、のらぬきみがな、うらにでにけり)
【訓読】武蔵野に占部肩焼きまさでも 告らぬ君が名占に出にけり
【意味】武蔵野で占いをして鹿の肩の骨を焼くが、決して口に出さない あの人の名がまさしくその占いに現れて、人々に知られてしまった。
【補足】
武蔵野: 『古事記』に牟邪志国、『萬葉集』に牟射志とあり、「邪」「射」とともに「ザ」ゆえに「ムザシ」と読む。
宇良徹: 占部うらへ: 占いをすること、占ふの連用形(下二活用、乙類「部」、甲類「徹」は変則)
可多也伎: 肩焼き、鹿の骨を焼く(仙覚『萬葉集註釈』)、象焼き(兆灼) 高崎正秀『萬葉集評釈』
○名前を明らかにする行為
乃良奴伎美我名: 告らぬ君が名
『萬葉集』巻1雑歌 舒明天皇1/1
「籠もよ み籠もち 掘申もよ…この岳に菜摘ます兒 家聞かな 告らさね…われにこそは 告らめ 家をも名も」

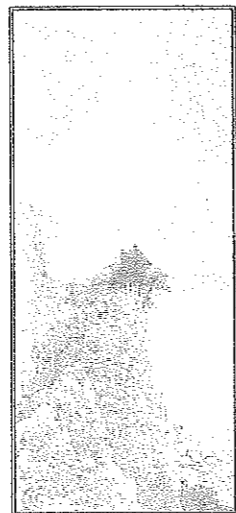
(籠(かごの意)も良い籠を持ち、掘串(土を掘る道具)も良い掘串を持ち…この岡で菜を摘んでいるお娘さん。あなたの家はどこか聞きたい。いいなさいな。…私にこそ教えてくれるでしょうね。あなたの家も名も)
 ○名前を明かす事は心を許すという国風(言葉に霊力が宿ると信じる「言霊信仰」)
 民間でも当時は名前を名乗ることは重要であった。名前を交わす事は
 →プロポーズと受諾の意思表示
 →婚姻とか妊娠などの相手を定かにする場合などの風習

○鹿骨占い
 契沖『萬葉代匠記』に、
 「日神天の岩戸へかくれましましける時、いかにしてか出まさむことをはし(奔)らんとて、思兼の神はかりごとに、天香山の鹿を捉へて、その肩の骨をぬきとり、鹿をははなちやりて、同じく香久山の葉若木(天之波波迦、カニワザクラ)を根こしにして、かの肩の骨を焼き占いし給う。…うらなひをするは、うらへかたやきというなり。思兼の神は卜部氏が祖なり。今もその規残りて亀の甲焼きてうらなふにも、ははかの木をもちゆといへり。むさしのも鹿のおほき所なれば、東のならばしに肩焼くうらなひすなるべし。」

14/3375
 【原文】武蔵野乃 乎具奇我吉藝志 多知和可礼 伊尔之与比欲利 世呂尔安波奈布与
 (むざしのの、をぐきがぎぎし、たちわかれ、いにしよひより、せろにあはなふよ)
 【訓読】武蔵野の をぐきが雉 立ち別れ去にし宵より 背ろに逢はなふよ
 【意味】(武蔵野の山間に住んでいる人(雉)が)立別れして行った夜から、私はずっとあの人に逢っていない。

【補足】
 乎具奇：をぐき、を岫：「を」は接頭語、山または両岸が迫って狭くなった地形。山の峰などか？ 各論あり。
 吉藝志：きぎし、雉子；キジのこと、雉子の頼使い(ひたづかい、行ったきり帰って来ない)行ったきり帰ってこない使い。[天孫降臨に先立って葦原の中つ国の平定に派遣された天稚彦(あめわかひこ)が、八年たっても復命せず、天上から詰問に遣わされたキジを射殺したという記紀の神話による]

世呂：せろ、背(夫)ろ、「ろ」は親愛の意味の接尾語。
 安波奈布与：あはなふよ、逢わないよ。
 「なふ」は未然形に接続する否定の意の助動詞。東国語。
 →夜逢いに来た背(夫)がそれ以来帰ってこない
 →天稚彦の雉子の頼使い(きぎしのひたづかい)を連想、夫が防人に出発した妻の歌??
 つまり、記紀神話を知っていた!!



14/3376
 【原文】古非思家波 素弓毛布良武乎 牟射志野乃 宇家良我波奈乃 伊呂尔豆奈由米
 (こひしけば、そでもふらむを、むざしのの、うけらがはなの、いろにづなゆめ)
 【訓読】
 (A) 恋しければ袖も振りむを 武蔵野のうけらが花の色に出なゆめ
 【意味】恋しいなら 私が袖を振りましょう。(武蔵野のうけらが花のように)決してお前は(あなたは)恋心を 顔色に表してはいけません。

【異本】
 或本歌曰 伊可尔思弓 古非波可伊毛尔 武蔵野乃 宇家良我波奈乃 伊呂尔R受安良牟 (いかにして、こひばかいもに、むざしのの、うけらがはなの、いろにぞあらむ)
 (B) いかにして恋ひばか 妹に武蔵野のうけらが花の色に出ずあらむ
 (どのように恋したなら、自分の気持ちを他に現さずにいられるだろうか。(私にはできそうもない。))
 →→どちらも男が女に対する気持ちを詠っている様に見えるが・・・

14/3379
 【原文】和我世故乎 安杼可母伊波武 牟射志野乃 宇家良我波奈乃 登吉奈伎母能乎
 【訓読】吾が背子を何ども言はむ武蔵野の うけらが花の時なきものを
 (わがせこを、あどかもいはむ、むざしのの、うけらがはなの、ときなきものを)
 【意味】恋しい人を何と言おうか。何時も見える武蔵野のうけらが花のように 何時という時なく恋しいものを。
 【補足】
 世故：背子； 妹に対する背から女の心を詠った歌と解る。

安杼可母： 何ども(なんと)言おうか
 登吉奈伎母能乎：時なきものを、「武蔵野のうけらが花」は「時なきものを」を引き出すための序
 時なきものをの意味?
 何時も思っている ←→ 何時も思っている訳ではない

○『萬葉集古義』 「朧の花は夏(だけ)咲く花だから時だけにかかる。時知らずというほどでない。」
 ○『萬葉集全注釈』 「朧の花は夏季にかけて長い間咲く花だから、時なしをひく。」
 ○契沖『萬葉代匠記』「夏花が咲くといえ、うけらの花は何時もあるとはいえないが、見ていると飽く時が無いように、ウケラの花の見飽かぬによせて、時なきものと心はいうのだ」

4/3377
 【原文】武蔵野乃 久佐波母呂武吉 可毛可久母 伎美我麻尔末尔 吾者余利尔思乎
 (むざしのの、くさはもろむき、かもかくも、きみがまにまに、あはよりにしを)
 【訓読】武蔵野の 草葉もろ向きかもかくも 君がまにまに吾は寄りにしを
 【意味】武蔵野の草は同じ方向に向く。そのようにともかくもあなたのなさるママに私は寄り添いましたのに。

【補足】
 母呂武吉： 諸向き；諸共に向く、いず方へもしなひ靡く。
 「武蔵野の草葉もろ向き」→「かもかくも」にかかる序詞
 可毛可久母： かもかくも；どうにでもこうにでも。
 吾者余利尔思乎：吾は寄りにしを、私は貴方の言うとおりに付き従ってまいりましたのに。

男女どちらの歌か？(男の気持ち？女の気持ち?)
 ○賀茂真淵『萬葉考』(『萬葉集考』)→言う通りにしたのに、なぜこのように疎くなってしまったの(女性の愁い)
 ○鹿持雅澄『萬葉集古義』
 →とにもかくにもあなたの言う通りにしてきたのに、今更何で疑うのか(男の女の疑心への抗弁)

2-3) 人間道のいはみつら
 14/3378
 【原文】伊利麻治能 於保屋我波良能 伊波為都良 比可婆奴流々々 和尔奈多要曾祢
 (いりまちの、おほやがはらの、いはみつら、ひかばぬるぬる、わになたえそね)
 【訓読】人間道の於保屋が原のいはみつら 引かばぬるぬる吾にな絶えそね

【意味】人間道の大家が原のイハイツラが 引けばぬるんで抜けるように、私との仲が切れて(絶えて)しまわないようにしてください。
 伊利麻治：いりまち； 東山道武蔵路の途上の道、人間道(別注)
 人間道の大家が原： 埼玉県内地名、不詳(別注)
 伊波為都良： いはみ蔓：「い(寝)は(這)ひ蔓」の訛？(別注)
 比可婆奴流々々：引かばぬるぬる、ずるずると緩んでぬれること。蔓や髪が抜けること。(鹿持雅澄『萬葉集古義』)柔らかに靡き依る貌なり。
 →男歌で女に呼びかける歌、私が誘いをかけたら(ひかば)の意
 和尔奈多要曾祢：吾にな絶えそね、私との仲が絶えないように。
 奈…曾祢：な…そね、禁止願望の終助詞；…してくれるなよ!

【補足】14/3416に類似の歌
 可美都氣努 可保夜我奴麻能 伊波為都良 比可波奴礼都追 安平奈多要曾祢
 上つ毛野 可保夜が沼の いはみつら 引かばぬれつつ 吾をな絶えそね
 (上つ毛野可保夜が沼(不明)のイハイツラが 引けばぬるんで抜けるように、私との仲が切れて(絶えて)しまわないようにしてください。)
 14/3416 上つ毛野 可保夜が沼の いはみつら 引かばぬれつつ 吾をな絶えそね
 14/3378 人間道の 於保屋が原の いはみつら 引かばぬるぬる 吾にな絶えそね
 →沼というので「いはみつら」は茆(じゅんさい)か?
 『萬葉集』にはこのような類似歌がいくつか見られる。混同?混乱?模倣?

2-4) 埼玉の津
 14/3380
 【原文】佐吉多萬能 津尔乎流布祢乃 可是乎伊多美 都奈波多由登毛 許登奈多延曾祢

(さきたまの、つにをるふねの、かぜをいたみ、つなはたゆとも、ことなたえそね)

【訓読】埼玉の津に居る船の 風をいたみ 綱は絶ゆとも 言な絶えそね

【意味】埼玉の津に留まっている 船の舳綱 (もやいつな) は、風が激しくて、切れることがあろうとも、私への言葉は絶やさないでください。

【補足】

埼玉の津：佐以多萬、埼玉郡埼玉郷とする (源順『和名類聚抄』)；行田市南部の利根川の津、海水が遡上していた。9/1744 高橋虫麻呂「埼玉の小崎の玉の沼…」の歌の小崎の沼もこの地、沼と川 (旧利根川) の接触点に埼玉の津があった。(田辺幸雄『萬葉集東歌』)

可是乎伊多美： 風を疾み、かぜが激しいこと。

都奈波多由登毛： 綱は絶ゆとも、

許登奈多延曾祢： 言な絶えそね 言：言葉 (音信) の往き来。

○類似歌

14/3398

「比等未奈乃 許等波多由登毛 波尔思奈能 伊思井乃手兒我 許<登>奈多延曾祢」

(ひとみなのこととはたゆとも、はにしなの、いしみのてごが、ことなたえそね)

人皆の言は絶ゆとも 埴科の石井の手児が 言な絶えそね

(世の人すべての言葉の行き来は絶えようとも 埴科の石井の手児の言葉はどうか 絶えずに寄こしてください。)

埴科： 長野県埴科郡

手児： 愛しい子

14/3381

【原文】奈都蘇妣久 宇奈比乎左之豆 等夫登利乃 伊多良武等曾与 阿我之多波倍思

(なつそびく、うなひをさして、とぶとりの、いたらむとぞよ、あがしたはへし)

【訓読】夏麻引く宇奈比をさして飛ぶ鳥の 至らむとぞよ我が下延へし

【意味】宇奈比を指して飛ぶ鳥が宇奈比に行き着くように、私はお前のところに行く行き着こうと、密かに思いを寄せていたのだ。

【補足】

奈都蘇妣久： なつそびく、夏麻引く；夏麻は夏に引いて取る麻。「績う」むものだから、「う」は「海上瀉 (うなみかた)」 「宇奈比」にかかる。(下河辺長流『萬葉集管見』) 「海上瀉」は上総の海上 (千葉沖の海) を指す。そこに向かって武蔵の鳥が飛ぶ。(土屋文明『萬葉集私注』)

宇奈比： うなび、場所不詳

伊多良武等曾与： 至らむとぞよ、(いつかはこの恋が成就することを願って) お前の所に行こうとしているのだ。

之多波倍： したはえ、下延へ：ひそかに思い (恋心) を抱くこと。

2-5) 万葉時代の大家族制

律令国家と大鳴郷戸籍 (略)

2-6) 多摩の横山

14/3531

【原文】伊母乎許曾 安比美尔許思可 麻欲婢吉能 与許夜麻敝呂能 思之奈須於母敝流

(いもをこそ、あひみにこしか、まよびきの、よこやまへろの、ししなすおもへる)

【訓読】妹をこそ相見に来しか眉引きの横山辺ろの鹿なす思へる

【意味】妹に会いたいばかりに来たのに、それをあたかも丘 (横山) 辺の鹿であるかのように、うるさく思うとは。

【補足】

麻欲婢吉： 眉引：横山にかかる枕詞 低く平らな稜線のような眉の形に似るところから

与許夜麻敝呂： 横山：丘陵の続き、「ろ」は接尾語、丘陵の続くあたり。

→「相聞」に収録する場所不明の横山、多摩の横山か？

思之： しし、食肉として用いる獣、鹿、猪、獣 またはその肉。

思之奈須於母敝流： 鹿なす思へる。岡の辺の鹿のようにつれなくされた。

→男の歌、「鹿なす思へる」はその思い。付き纏ううるさい男？か 獣の様にダサイ男？

○「鹿であるかのようにうるさく思うとは」(高木・久松『日本古典文学大系』)

○「けものように思っている。家の人」(中西進『萬葉集全訳注原文付』)

20/4417

【原文】天平勝寶七歳乙未二月相替遣筑紫諸國防人等歌

阿加胡麻乎 夜麻努尔波賀志 刀里加尔弓 多麻<能>余許夜麻 加志由加也良牟

(あかごまを、やまのにはかし、とりかにて、たまのよこやま、かしゆかやらむ)

右一首豊嶋郡上丁椋椅部荒虫之妻宇遲部黒女

二月廿<九>日武蔵國部領防人使掾正六位上安曇宿祢、三國進歌數廿首、但拙劣歌者不取載之。

【訓読】天平勝寶七歳乙未二月、相替りて筑紫の諸國に遣さる防人等の歌

赤駒を山野にはがし捕りかにて多摩の横山徒歩ゆか遣らむ

右一首は豊嶋郡上丁椋椅部荒虫の妻宇遲部黒女のものなり。天平勝寶7年2月29日、武蔵國の部領(ことり) 防人使掾正六位上安曇宿祢三國が進(たてまつ) れる歌數は廿首なり。但し拙劣なる歌のみは之を載すを取らず。

【意味】赤駒を山や野に放して とらえかね 多摩の山並みを 夫を歩かせて行かせることであろうか。

天平勝寶七歳乙未二月、交代して筑紫の諸國に派遣される防人等の歌

右の一首は豊嶋郡上丁椋椅部荒虫の妻宇遲部黒女が作った。天平勝寶7年2月29日に、武蔵國の部領防人使の掾正六位上安曇宿祢三國が上進した歌の數は20首であるが、但し拙劣なる歌だけは載せなかった。

【補足】

阿加胡麻： あかごま、赤駒、赤毛の馬

波賀志： はがし、放し：

刀里加尔弓： とりかにて (捕りかねての詛)

多摩の横山： 多摩川南岸の山なみ。

加志由加也良牟： 加志；徒歩；徒歩ゆか遣らむ：馬で行くことができるのだが、その馬を捕らえられずに徒歩で遣ることか。

(3) まとめ

○『萬葉集』は、多くの編者により永い時間かけて採録されていたものを。天平宝字3年(759)以降、大伴家持が現存に近い20巻形式にまとめたものであろう。

○仁徳天皇の皇后磐姫の作と言われる歌から天平宝字3年家持の歌まで約400年にわたる全国各地、各階層の人の歌が収められている。

○『萬葉集』には東歌、防人歌などを含み豊かな人間性を素朴、率直に表現した歌が多い。現存する最古の私撰集で萬葉仮名を多く用いて記述されている。

○「かた焼」は、青梅御岳神社神事、埼玉金鑽神社の神事に見る。また昔、あきる野の「あきる神社の太占神事」や埼玉不ふじみ野市鹿見しき塚遺跡に見られるように、往古萬葉の時代には、関東のあちこちで行われていた。

○さらす手作り(調布)の風習は、和銅四年に「桃文師(あやどりし)」が国内21国に派遣され全国に広まったことや、多摩地域では桓武天皇期に布田の菅家の所縁広福長者らに依って広まり定着して行ったものであろう。関東各地に調布、布田、麻布のような名前が地名として残っていることが「さらす手作り」が広く行われたことを物語っている。

○多摩の横山とは、江戸初期の八王子宿といわれたところを昔は全て横山と云った広い範囲であったとの言い伝えがあるが『新編武蔵風土記稿』がいうように、その特定地域ではなく府中から多摩川そして原町田へ続く官人や防人が移動した古東海道沿いの広い地域の多摩丘陵を指していたのであろう。

○『萬葉集』東歌の多くは、個人の歌の体裁を借りて歌った労働や儀礼などの場で歌われた民謡や酒宴の席で歌われた歌や、また東国の人々に共有されていた歌謡のような集団歌であると思われる。

令和2年10月17日

